

[others]

「故木村幾生先生と私」

28 回生 長谷川 実

木村先生とはよく呑んだ。教壇の先生は私にとって特に苦手な先生だったが個人的には本当に親しくしてもらった。30 年位昔になるうか先生は夜、下駄ばきで拙宅へこられた。そして持ってこられたウイスキーが無くなるまで呑んだ。酔うと二人の間の論戦は盛り上がった。相当激しい言葉のやりとりもした。終わるのは大体日付が変わってからだった。酒がまわると二人とも単なる酔っぱらいにすぎないが、ただ先生は最後に必ず「長谷川君人間は死ぬ時が大事なんや、そこが一番大事なんや」と繰り返すつづやいておられた。私も若かったからそんなもんかなと単純に納得していた。またそのつづきがあった。嫁はんより先に死ななあかんで、これも絶対やで、といいながら拙宅を去って行かれた。私達夫婦が見送っていても決して振り向かれる事はなかった。大きな後姿が闇の中へ溶けこんで行くのはなんとも寂しげに見えた。先生はその頃から人間の孤独を直視しておられたのだと思う。今になって想うと本当にその通りだと思うし、先生は自分の予定通りに旅立ってゆかれた。先生も私も癌という人生で最も苛酷な病気におかされ二人ともそれなりの苦しみ方をした。私は現在も癌をかかえながらその苦しみに耐えている。でも正直ストレートに肝臓癌で完治する見込みは現在ではない。癌といわれた時は、恥も外聞もなくうろたえた。藁にもすがる気持ちとはこの事だろう。勿論落着いてそれを受け止められる人もない事はないと思うが少ないと思う。ただ表に出す人と出さぬ人の違いがあるだけだと思う。私は告知を受けてから半年以上笑う事はなかった。テレビ等でまるで流行のように癌をテーマにしたドラマや、体験談などが組まれていると、おそろしくて目を向けられなかった。先生も同じような思いだったと思う。その頃、こちらから一度だけ電話をした事があったが、非常にきびしい声で電話もするな、見舞いにも来るなと申し渡された。先生の気持ちも察してあまりある。私自身も三回孔をあけて焼き、最後は 30 糎程切開した。最後の大手術は全身麻酔だったから、ある意味では楽だったが、ラジオ波で焼くのはこの世の中でこんな痛い事があるのかと思う程痛かった。その頃自殺も考えた。しかし周囲の人々に励まされ、なだめられて何とか生きようと思えるようになった。最後の手術を担当して下さった〇医師の「何とかするから心配せんと正月は手足を伸ばして家で過ごしなさい」といわれた言葉で自分の肩から死神が落ちて行くのを感じた。それから 1 ヶ月に一度の血液検査、3 ヶ月に一度の MR、CT の検査等に耐えながら何とか人並みの顔をして生きている。医師の言葉の大切さを身にしみて覚えた。先生の事より自分の事ばかり書いたが、先生との思い出は書ききれない。特筆すると 10 年程前から油絵を始められて非常に熱心に描いておられた。先生の人格そのもの、正直で真面目な好感の持てる作品であった。そんな先生を思う時、7 年位前から飼っておられた雌の柴犬ハルを紹介しておかねばなるまい。私から見ると御家族の次に大切にしておられたと思う。先生の姿が見えない今日この頃、ハルもさぞ淋しい思いをしている事と思う。人生は別れたともいわれている。その通りだと思う。私も遠くない将来、先生のおられるところへ行くとと思う。そこで一緒にエンマ様の顔でもスケッチしましょう。先生のご冥福を心からお祈り致します。先生に捧げる川柳をつくりました。

「佛前へ師の足蹟よ大ききよ」

合掌
以上

* 通巻 183 号 2007 年 4 月 1 日発行(H19-No.1)より